

● 優秀賞

共によりよく生きようとする心を 育てる道德教育

茨城県龍ヶ崎市立城南中学校 おかだたえこ 岡田多恵子

1 主題設定の理由

青少年による凶悪な犯罪が報道されるたびに、「病んだ心」「人間性の欠如」ということが声高に叫ばれる。最近では「自分さえよければ」という間違っただ個人主義が横行し、些細なことで「切れる」若者が増えてきている。「自由」と「わがまま」の相違を理解できず、自分が感じた「不快」という感情のままに衝動的に行動する傾向は、本校の生徒の中にも見られる。このような青少年の増加を引き起こしている原因は何なのだろう。

原因の一つとして、子ども達を取り巻く社会の急激な変化がある。最近では少子化により、子どもに「我慢」という経験をさせることが少ないため、心の耐性が育っていないのである。本校でも、一人っ子、二人きょうだいという生徒がほとんどである。もちろん全員が自己中心的な傾向をもっているというわけではない。ほとんどの生徒は、順調に学校生活を送っているが、以前よりも確実に集団不適應を起こす生徒が増えてきている。「わがままな個人主義」により、対人関係をうまく築くことができないのである。また、対人関係で不適應を起こす原因の一つとして、言葉を使って、他人と上手にコミュニケーションがとれないということがあげられる。先日けんかしていた生徒を指導した際、その原因を尋ねたところ、「悪口を言われて我慢していたんだけど、我慢できなくなったから殴った。」「悪口を言ったが、別に何も言い返してこなかったの、ついエスカレートしてしまっ

た。」という返事が返ってきた。まさにコミュニケーション不足の典型的な例である。家庭環境の変化により、他人と言葉を交わさなくても生活できてしまうということが、コミュニケーション能力の未発達を引き起こす要因になっている。これが「わがままな個人主義」を助長する「思いやりの欠如」につながっている。

しかし、人が社会の中で生きていく以上、一人きりでは生きていけない。その上これからの時代は先の見えない時代であると言われる。国際化、情報化、科学技術の発達、悪化する環境問題、高齢化、少子化など子どもを取り巻く社会環境が大きく変化する時代である。そういう時代にあって、心豊かな人生は「他者との共生」なしにはありえない。心豊かな人生とは、人と人との支え合い、助け合い、互いに高め合って、心穏やかに生きていくことであり、そのためには、人と人、人と自然が「共に生きる」社会の実現を目指していく必要がある。それ故生徒たちの感性を磨き、豊かな人間性を身に付けさせ、「共によりよく生きようとする心」を育てていきたいと考えたわけである。

そこで、学校生活の中にまず「共生社会」を築き上げることで、「共生社会」の大切さと必要性を生徒に感じさせることができるのではないかと考えた。学校における「共生社会」の実現のため「道德の時間」と「地域を生かした体験活動」を核として、家庭・地域との連携を図りながら、生徒の中に「共によりよく生きようとする心」を育てていき

いと考え、本主題を設定した。

2 生徒の実態

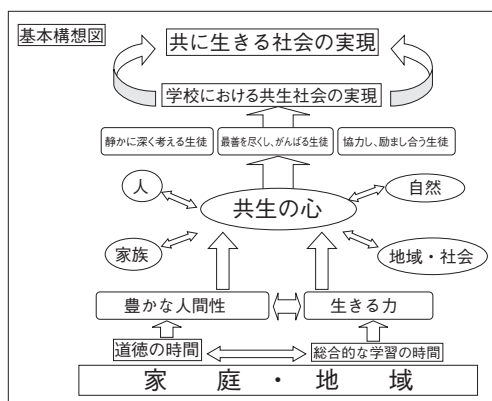
本校は、3年前までは暴力行為が多発し、教室や廊下の壁には、今だにそのころの名残が見られる。現在は生徒も落ち着いており、頭髮や服装で注意を受ける生徒は数名見られるが、教師に対して反抗的な態度をとったり、反社会的な行動をとる生徒はいない。

不登校生徒は学校全体で数名いる。しかし、担任の努力により、少しずつ保健室登校や放課後登校をするようになり、現在は減少してきている。

1学期に学校生活に関するアンケートを実施したところ、少数ではあるが「いじめ」や「友達関係」の悩みがどの学年からもあがってきた。どの学年も生徒たちは仲良く過ごしているが、時には自分の気持ちをきちんと表現できずに友達と気持ちのすれ違いを起こし、けんかがこじれて、自分たちだけでは解決できなくなることもある。教師の仲裁が必要になった場合にいつも感じることは、もっと誠意を尽くして語り合えば簡単に解決できたのではないかということ、思いやりの気持ちをもって相手の言うことを受け止められればトラブルになることはなかったのではないかということである。

3 基本構想

本校の生徒の実態から考えると、「共にによりよく生きようとする心の育成」のためには、体験を通して生徒自身に思いやりの心や生命を大切にする心、人権尊重の心を育てていくことが必要なのではないかと考えた。また、本校は地域の人々に支えられて学校の立て直しを図ってきたという経緯があるので、地域を巻き込んだ学校作りが不可欠であると考えた。そこで、次の図のような基本構想を掲げ、



「道徳の時間」と「地域を生かした体験活動」とを核として「共にによりよく生きようとする心」の育成を図った。

4 研究の仮説

- (1) 道徳の時間と総合的な学習の時間との関連を強化し、地域を生かした体験活動とコミュニケーション活動を重視することで、「人と共に生きる」ことの大切さを実感させることができるであろう。
- (2) 家庭・地域との連携を図り、地域の活動に積極的に参加することで、生徒自身が「地域と共に生きている自分」を感じることができるであろう。

5 研究の実践

- (1) 「人と共に生きる」ことを実感させる授業①

～総合的な学習との関連を強化した、体験を重視した道徳の時間の指導～

〈第1学年の授業実践〉

主題名『身近な国際理解』

ア 授業構想

内容項目4-(10)「世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って世界の平和と人類に貢献することは、中学生にとってはなかなか実感しにくい内容である。テレ

ビのニュースや新聞などを見ると、「これからこういうことにも目を向けていかなければならないんだ。」と思うようだが、普段はほとんどの生徒が「自分たちとは関係がない。」と考えているのが実情である。

イラク戦争、北朝鮮による拉致事件と、生徒が国際的な問題に目を向けざるを得ない不幸な事件が相次いだ。生徒はこれらの事件を「ひどいことだ。」と捉えはしても、「自分に何ができるだろうか。」とは考えない。

しかし、これからの時代に生きる生徒たちが、中学生の頃から「自分も国際社会の一員である。」という考えをもつことは、共生社会の実現には欠かせないものであると考えた。そこで、生徒が「世界の中の日本、国際貢献」をもっと身近に感じられるようにするにはどうしたらよいかと考えた。

1 学年の「総合的な学習の時間」のテーマは「国際理解」である。そこで、「総合的な学習の時間」に体験したことを「道徳の授業」と関連させることで、「世界の中の日本、国際貢献」についてより深く考えられるようになるのではないかと考えた。

イ 「地球は一つ、世界は仲間」(総合的な学習の時間)の実践

本校の生徒は、普段外国の人と接する機会が少ない。本市に在住している外国人の多くは、本市にある私立大学に在籍する留学生である。また、海外旅行の経験のある生徒はほとんどなく、身近な人が海外に在住しているという生徒も少ない。

このような環境にあって、教師が「これからの時代に生きる者として、国際的視野と国際社会で生きる能力を身に付けることが必要なのだ。」と声高に叫んだとしても、生徒にとっては現実味のない空虚な話でしかないのである。

そこで、実際に日本と外国のつながりや、自分が興味をもった国について調べたり、外国の人を招いて交流会をもったりすることで、

世界の人々は共に助け合って生きているのだということを実感してほしいと考えた。

(i) 個々のイメージをふくらませる活動

現代は、自分たちの生活が外国とのつながりなしにはありえないことを実感させ、「国際理解」に対するイメージをふくらませたいと考え、次のような活動を行った。

- ・私たちの食卓にあがる食物、身の回りの物、洋服を媒体として私たちの生活は外国とのつながりなしにはあり得ないことを実感する。(調査活動)
- ・外国の出来事が直接自分たちの生活にはね返ってくることがあること(例 ガソリンの値上げ)をニュースや新聞記事から学ぶ。(メディア学習)
- ・ワールドカップ出場国をモチーフにしたゲーム学習をする。
- ・海外で生活した人の話を聞いたりVTRを視聴する。
- ・イメージマップ作りをする。
- ・ゲームを通して発想を磨く。

(ii) 生徒のイメージを刺激するための活動

〈いろいろな国の人との交流活動(体験活動)の実践〉

○龍ヶ崎市の国際交流の実態について知り、市内在住の外国人との交流会を行う。

市の国際交流担当職員に依頼し、市内在住の外国人の実数や出身国、また市で行っている国際交流事業の様子について話してもらった。自分が住んでいる地域にもいろいろな国の人が住んでいるということを知り、自分たちも国際理解について考えていくことが必要だということを理解することができた。その上で、市内在住の留学生たちとの交流会をワークショップ形式で行った。

事前に、知りたいことについてのアンケートをとり、それに沿って話をしてもらった後で質疑応答という形をとった。留学生と積極的にコミュニケーションをとろうと

する態度を育てることをねらいとして、生徒主体のワークショップ形式を用いた。生徒たちは、留学生の国の様子や日本との違いに驚きながらも、興味をもって話を聞いていた。

○JICA（国際協力事業団）の研修生との交流会

JICAのサーモンキャンペーンを活用し、JICAの研修生をゲストとして招待して一緒に話をしたり、遊んだりして交流を図る機会をもった。JICAからは中南米、アフリカ、アジア諸国から来日した11人の研修生が来校してくれた。

生徒の希望ごとに国を決め、グループを組んだ。生徒の希望を優先し学級の枠にとらわれずにグループを決定した。その中で「ゲストの国について調べる」「校内を案内する」「グループの人やゲストの名札を作る」「ゲストと遊ぶ準備をする」「プレゼントを作る」「招待状を作る」などの役割を決めて、準備を行った。

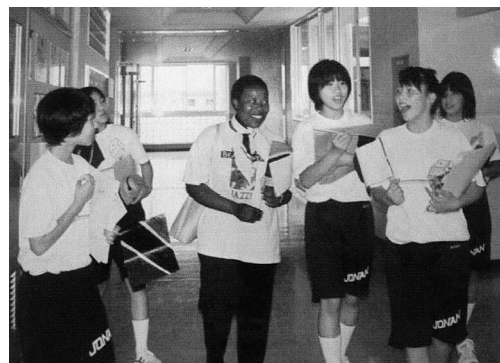
また、外国の方に日本の文化を知ってもらおうということで、地域の方にボランティアとして参加してもらい、お茶を点ててもらい琴を演奏してもらった。生徒も知識としては抹茶や琴を知ってはいるが、実際に飲んだり琴にふれたりする経験は皆無であった。自国の文化にふれることも大切であると考え、セレモニーの中にお茶会を取り入れゲストだけではなく生徒の希望者もお茶会に参加させた。目の前でお茶を点ててもらうことは、ほとんどの生徒にとって初めての経験だったため、皆興味津々で眺めていた。

ゲストとのコミュニケーションは、英語で行うことになった。中には英語のできないゲストもいたので、JICAにお願いして通訳として6名の職員をつけてもらった。

しかし、生徒は言葉が通じなくても、手振り、身振りで何とか意志を伝えようと努



●写真1／セレモニーの様子



●写真2／交流会の様子

力していた。JICAの職員も、できるだけ生徒に任せ、どうしても伝えたい事がある場合のみ通訳をするという姿勢で臨んでくれた。生徒は計画の段階から、ゲストと日本の遊びをしようと考え、カルタ・けん玉・お手玉・福笑い・習字等を一緒に行ったり、ゲストが勉強している野菜作りにちなんで「ベジタブルバスケット」を行ったりと、楽しく交流することができた。これらの活動を通して生徒は「コミュニケーションは言葉ではない。伝えようとする気持ちが大切なのだ。」ということを学んだ。

(iii)「身近な国際理解」の道德の授業実践

総合的な学習の時間にいろいろな国の人とふれあう機会をもってきたので、それらの活動の中から生徒が感じた「人は生まれた国や人種、民族、育ってきた環境、文化が異なっても、同じ地球に生きる仲間なのだ。」とい

う思いを発展させ、自分たちなりの国際貢献という意識にまで高めたいと考え、暁教育図書「リヤカーは海を越えて」という資料を用いて、「身近な国際理解」という主題で道德の授業を行った。

この資料は、東京でリヤカー製造業を営む「村松さん」という人が、国連から依頼されて、タンザニアにリヤカー工場を造るために尽力した様子を描いたものである。村松さんの心情に寄り添い、「真の国際貢献」について考えさせたいと考え、村松さんに連絡を取り取材をさせてもらった。距離的に遠い国の話だけに、生徒に臨場感をもたせたいと考え読み物資料だけではなく村松さんから実際に聞いた話を再構成して生徒に提示したり、村松さんが実際にタンザニアで支援をしている様子をまとめたVTRを活用したりして授業を組み立てた。

また、終末には村松さんから生徒たちへのメッセージをVTRで流した。仕事の関係で、実際に教室にゲストとして来校してもらうことはできなかったが、村松さん本人のメッセージは生徒の心に驚きと感動を呼んだ。生徒からは「真の援助はお金ではない。その国や、その国の人のことを真剣に考えた援助でなければならない。」という発言が聞かれた。

総合的な学習の時間に交流したゲストの中にはタンザニアの人はいなかったが、同じアフリカの人が何人もいたので、資料を身近に感じる事ができたようであった。自分の国のために家族と離れて日本に研修に来ているJICAの研修生が、資料の中の研修生アベベさんと重なり、祖国のためにがんばる人を何とかして応援したいという気持ちがより高まったようであった。

その後、総合的な学習において、「国際理解」ということばからイメージを広げる「イメージマップ作り」を行ったが、その中に「他の国の人に対して自分が何ができるか。」「援助」「ボランティア」「青年海外協力隊」な



●写真3／授業風景

どのことばも見られるようになった。この気持ちこそが「共に生きようとする力、共生の力」に他ならない。道德の時間だけでは「遠いよその国の出来事」「村松さんみたいな人もいるんだな。すごいな。」で終わってしまったかもしれないが、総合的な学習と関連させることで、資料をより身近に感じさせることができ事後の活動の幅を広げることができるようになった。

(iv) 事後の活動

アンゴラで「こどものまちプロジェクト」というNGO活動をしている稲田菜穂子さん（東京都出身）の講演会を総合的な学習の時間に行った。本校の教師の友人ということで、一時帰国した稲田さんに来校してもらい、「こどものまちプロジェクト」の活動を始めた理由や、現在の活動の様子などについて話をしてもらった。内戦によって家や家族を失ったアンゴラの子どものための教育に携わっている稲田さんは、映像を交えながら「こどものまち」にいる子どもたちの様子を語ってくれた。日本から遠く離れた国で他国の子どもたちのためにがんばっている稲田さんの姿は、本校の生徒たちに感銘を与えた。ぜひ「こどものまち」の子どもたちと交流したいという生徒たちの申し出によりまずコミュニケーションがとれるようにしようということになった。現在、ポルトガル語でメールの交換がで



●写真4／本校での講演会の様子



●写真5／アンゴラで本校宛の手紙を入れる子どもたち

きるようにしようと、ボランティア講師の方をお願いして総合的な学習の時間にポルトガル語の勉強を始めたところである。

(2)「人と共に生きる」ことを実感させる授業②

ア 授業構想

「わがままな個人主義」の結果と「共生社会」の必要性について考えさせたいと考え、埼玉県で起きた、中学2年生の少年3人によるホームレス殺人事件の新聞記事を資料に用いて、1年生を対象に授業を行った。

ショッキングな事件の背景について取材した新聞記事であるため内容が刺激的であることと、いろいろな価値が混在していることから発問を絞る必要があることを考慮して授業を組み立てた。特に、少年の「死ぬとは思わなかった。」ということばと「お父さんとお

母さんに悪かった。」ということばをキーワードとして「共生」と「人権」について考えさせた。

関連価値として「生命尊重」「家族愛」を念頭に置き授業を組み立てた。

イ 授業実践

範読のあと、教室中に重苦しい沈黙があった。予想はしていたが、事件を引き起こした少年が14歳であること、部活動に励む普通の少年であること、3人で1人の人間を死なせてしまったことにショックを受けてしまった。

「死ぬとは思わなかった。」という少年達の言葉に対しては、多くの生徒が「死ななければ暴行してもいいのか。暴行自体がいけないことだ。」という考えや「3人で1人に暴行するのはいけない。」という考えをもっていった。

少年達に同情的な考えをもった生徒も少数いたが、生徒の規範意識の高さにほっとした。また、一人の少年が警察から連絡を受けた母親に「おまえなの。」と聞かれて、「言えなかったんだ。」と泣き崩れたという場面には、ほとんどの生徒が共感を覚えたようだった。加害者の両親の後悔や子どもへの思いにも、自分の親を重ね合わせていたようであった。

授業者の意図としては、「お父さんやお母さんに悪いことをした。」ということばを否定的に捉えさせ、自分が失わせた生命の重さをもっと強く感じさせたかったのだが、生徒は「自分が起こした事件のせいで、家族まで周囲から冷たい目で見られてしまう。」という思いが強く、「自分の家族につらい思いをさせてしまう。自分が捕まったら親を悲しませてしまう。だから、話せなかった。」という意見がいくつも出てきた。また、野球部でがんばっている生徒は少年Aに自分を重ねて、「甲子園を目指してがんばってきたのに、夢はもう終わりだ。」という気持ちを発表した。

こういう思いは規範意識の向上にはつながるが、「共に生きる」という気持ちからは離

れてしまう。そこで、自分の「家族」への思いが強い生徒達に「他人の生命を理不尽に失わせたことについて、生命の重さをどう考えるか。」と「亡くなった人にも家族がいたのだ。その人の家族の気持ちはどうだろう。」という発問を投げかけ、切り返しを行った。生徒にとってはホームレスの人にも家族がいたというのは驚きだったようだ。そのことから、生命や人権はどんな人であっても公平に尊重されなければならないものであるということが理解できたようであったが、「家族への思い」が強い生徒が本当に他者の生命の重さが分かったのかどうかは、1時間の授業だけでは推しはかることができなかった。

授業のあと、一人の生徒が「先生、この資料を読んで泣けてしまった。」と話しに来てくれた。この後、自分の家族についていろいろと考えてしまったという生徒もいた。心痛む資料であったが、生徒にとってはいろいろな思いを残した授業であったようだ。

(3) 地域の中で生きている自分を自覚させるための、地域を生かした体験活動

ア 「竜Koi Ryu ダンス」の実践

龍ヶ崎市の振興のために、市の青年会議所が中心になって、これまで市内で踊られていた民謡をベースとした踊りの曲をアレンジして、ラップ調のダンスを作った。

「このダンスをみんなで踊ろう。」という意見があったので、1年生全体で青年会議所の方を講師として学校に招き、ダンス講習会を開いた。毎日練習して、市の文化会館で行われた市の「レクリエーション祭り」のステージで有志が「竜Koi Ryu ダンス」を披露した。

当日は本校の生徒や保護者が多数応援に駆けつけ、本校の「城南スピリッツ」というダンスチームの発表を見守った。本校ダンスチームの発表は好評で、その後は市の「いがっぺ市」というイベントにも頼まれて出演した。



●写真6／文化会館のステージ

これらの活動を通して、市の青年部の人たちと生徒との交流も深まり、自分たちも地域の一員だという自覚が深まったようだ。現在では全校生徒が踊れるようになり、地域の行事にも積極的に参加する姿が見られるようになった。

また学区内で行われた、市の行事「まいんバザール」の清掃ボランティアを生徒会が中心に募集したところ、1日で定員を上回る応募があった。

地域の方を「総合的な学習の時間」の講師やボランティアとして学校に招くだけでなく、ダンスを通して市内に積極的に出かけていくという形ができあがったことは「地域に根ざした学校作り」という点で大いに成果があった。生徒自身が「地域」に目を向け、地域で生きるという姿勢を見せたことは、「地域との共生」という点で大変有意義であった。

2年生の進路学習の一環として行った「職場体験」や、生徒会を中心とした保育所の行事の手伝いボランティアも、地域に生きる自分を自覚するには、よい機会となった。

イ ハローワーク学習会の実践

進路学習の一環として保護者を講師とした職業学習会「ハローワーク学習会」を行った。まず生徒の希望調査により職種を決め、保護者から講師を募集した。その上で生徒の実行委員を募集し、企画・運営を任せた。保護者を講師としたことで、「〇〇さんの親」という



●写真7／保育所の運動会に参加

見方だけではなく、「地域に貢献する人」という見方もできるようになったことが、生徒の感想からうかがえた。

保護者や地域の方に学校における生徒の姿を積極的に見てもらうことで、学校の活動に対する理解が深まった。

ウ 家庭・地域への広報活動

道徳の時間や総合的な学習の時間の取り組みの様子について、家庭や地域に知らせたいと考え、PTAの授業参観に取り入れたり、学年通信・学級通信で知らせたりしている。地域の方との協議会においても、学校の活動や生徒の様子をPRするようにしている。このような広報活動の積み重ねにより学校に関心をもってもらい、「地域が子どもを育てる」という意識を、家庭や地域の大人達にもってもらうように努めている。

(4)心を育てる環境作り

人間は荒れた環境の中にあると、気づかぬうちにその環境に慣れてしまい、次第に心が荒れてくるものである。だから美しい物を美しいと感じられるような感性を身に付けさせるためには、生徒の周囲の環境が美しくなければならない。そこで、昨年度から学校全体で環境作りに取り組んできた。その一例として、「ギャラリー城南」があげられる。

本校は校舎の構造上、生徒の昇降口付近が大変暗い。そこで、少しでも明るく美しい環

境を作るために、移動式の壁を取り払い「ギャラリー城南」というオープンスペースを作った。そこには県の近代美術館から定期的借りている絵画を飾り、季節感のある飾り付けを行った。時には生徒の作品を飾ったり、理科の「やってみようコーナー」を作ったりして、生徒が集える空間とした。



●写真8／アカベラの発表



●写真9／ギャラリー城南の活用（1）



●写真10／ギャラリー城南の活用（2）

また、体育祭では、事前に各学級に1台ずつカメラを渡し、撮影担当者が写した写真の中から学級2点ずつ出品してもらい、「ギャラリー城南」で「体育祭フォトコンテスト」を行った。このように生徒の作品の発表や総合的な学習の発表物を展示する場としても活用している。

特に生徒に好評なのは、そこに置かれたピアノである。休み時間に誰でも自由に弾くことができるので、ピアノの周囲には生徒の姿が絶えない。

また、企画書さえ通れば、誰でも自由にその空間でイベントを行うことができる。昨年は、3年生有志によるアカペラのミニコンサートや、1年生有志と地域ボランティアの方による琴の演奏会も開かれた。3年生有志グループは、「ギャラリー城南」でのコンサートが地域の方の耳に入り、市の「いがっぺ市」にも参加した。環境が生徒の学校生活に潤いをもたらし、心を和ませられる場として活用されるばかりではなく、地域と学校との連携にも一役買っている。

6 成果と今後の課題

(1) 成果

ア 仮説(1)について

道徳の時間と総合的な学習の時間を核として体験を重視した実践を行ったことでこれからの時代は世界の人々と共生することが必要であり、自分も社会に役立つ人間になって世界の人々に貢献したいと考える生徒が増えてきたことが大きな成果であった。

2年生は総合的な学習で「福祉」についての学習を行っているが、道徳の時間に培った心情を実践へとつなげることが可能になり成果を上げている。

また、それ以外にも、「生徒主体の学校作り」という観点から、道徳の時間でも「生徒主体の授業の工夫」ということを重点的に研

修している。「生徒を司会にした話し合いの工夫」や「自己を振り返る場面を充実させた話し合い活動」「生徒の活動をもとにした自作資料の活用」などに、教師が意欲的に取り組むようになったことも成果の一つである。

イ 仮説(2)について

地域の行事に中学生が出て行くことで、地域における本校生徒の評判があがり、地域の大人と生徒とのつながりもでき、それがまた生徒を育ててくれるというよい意味での相互作用があった。

生徒会が中心となって、地域の保育所の行事や市の行事をボランティアで手伝ったり、学校周辺の清掃活動を行うことで、地域の中で生きている自分を見つめ直すよい機会となった。

また、本校には地域の民生委員などを主体とした「ハートいっぱいネットワーク会」という組織があり、その委員と生徒が話し合う機会を年に2回設けている。地域の方の声を生徒が直接聞けるという点で、大変有意義である。「地域との共生」という点で大変効果があった。

(2) 今後の課題

学校全体で取り組んでいることで、生徒一人ひとりが、学校の主役は生徒であり、自分たちの手でよりよい学校生活を築いていかなければならないということ、そのためには他人を思いやり助け合って、共によりよく生きていこうとする気持ちをもたなければならないことに気がついた。

しかし、「共に生きる」ということをより深く生徒に感じさせて、生きていく糧とすることができるような道徳の授業の構築と、家庭・地域に開かれた学校作りという点ではまだ改善の余地があるので、今後も研修に励んでいきたい。

参考文献：中等教育資料